

## 令和四年度 第二回 世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群公開講座

### 中野 知幸 先生「古代北陸の航海・境界に関わる祭祀遺跡 —寺家遺跡を中心に—」質問と回答

Q1 環境的に冬はきびしい状況にあるのに、なぜ人がこの場所に住むようになったのでしょうか？

A. 講座では、弥生文化の入り口「邑知潟」のロケーションから解説しましたが、やはり広大な内水面と農耕に適した低地が基盤となり、羽咋を能登の拠点として飛躍させたと考えています。

冬の海岸部は、猛烈な季節風と海鳴りの轟音の世界ですが、砂丘列の内側に入ると、内水面は非常に静謐です。

日本海交流の交通の要として能登の表玄関であり、豊かな生産基盤でもある、能登で他にない絶好の環境であったと思います。

Q2 小島西遺跡から出土した木製祭祀具のうち舟形はどんな形状だったのでしょうか？丸木舟？構造船？

A. 舟形の形状は、丸木舟状です。

スライド No. 15（映像では 19:51 頃）をご参照ください。

8 世紀後半から 9 世紀代にかけて多量の木製祭祀具が使用されています。

当日は、このスライドは、あっさり流してしまったとおもいます。

資料に付けられればよかったのですが、ページ数の都合でカットしました、すみません。

Q3 小島西遺跡は「能登国府津の祭祀 東北・北方世界へ向けた祓えの祭祀場」とありますが、「東北・北方世界」にはアイヌは含まれるのでしょうか？

A. 「アイヌ民族」とは、近世の北海道を中心とする先住民族を指す用語と認識しています。

古代の律令制外の北方民族と同一視できるかは、考古学的には説明できない状況と思います。

古代に「蝦夷」と呼ばれた人々がすむ東北・北方世界に加え、さらに北方の肅慎や靺鞨といった北方民族と接する対外交渉の前線基地が能登の加島津であったと考えています

Q4. 寺家遺跡は、大陸や朝鮮半島との関わりはあるのですか？渤海との関わりが大きいのでしょうか？

A. 寺家遺跡の遺構・遺物からは、渤海との関わりを示唆する資料はみつかりません。

とはいえ古代気多神社の祭祀が、渡海守護や境界祭祀にも関わっていると考えられています。

初期加賀国府の国津とみられる現在の金沢港周辺の遺跡群では、畝田ナベタ遺跡で、渤海使節のものとみられる鍍金された帯金具が出土しています。

衣服令に規定がないので、国内の帯金具ではありえないものです。

[https://www.ishikawa-maibun.jp/wp-content/uploads/2018/03/jouhou\\_07.pdf](https://www.ishikawa-maibun.jp/wp-content/uploads/2018/03/jouhou_07.pdf)

加賀国に渤海使節を安置供給する「便処」が置かれていましたが、そこに滞在した使節が身につけていたのでしょう。

加賀国津で安置供給・接遇をうけ、気多で渡海守護と疫神祓えの祭祀をおこなひ、福良津から出発したルートを想定しています。

**Q5. 折口説: 気多→桁(ケタ)とありますが、近くに気比大社もあります。同じく頭に「気」がつくが「気」に何か意味はあるのでしょうか？**

A. 「ケタ」の「気」の意味については、よくわかりません。

「ケヒ」は、「筥飯」を当てる史料もあり、若狭地域の「御食(みけつ)国」と関わらせて理解されています。

氣比神宮が坐す敦賀港は、古代から北陸道の物資・情報を集中させて都城に送る、重要な港湾です。

氣比も気多も、古代にはほぼ同時に神階昇叙し、地方神社では破格の厚遇措置を受け、従一位まで昇叙します。

北陸道の重要な港湾地域に坐す神として共通性があり、社名に「気」を共有していることは興味深いところです。

**Q6. 出土した遺物に馬具類はありますか？**

A. 寺家遺跡祭祀地区の上層遺構面「土器と祭具の集積遺構」からの出土品に、鉄製の「くつわ」があります。

祭祀に使用された奉獻品のなかに馬具も含まれていたと考えられます。

『寺家遺跡発掘調査報告書総括編』の「祭祀地区の再検討」の章に図面を載せています。

<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/65363>